

朱日記

泉鏡花

青空文庫

「小使、小ウ使。」

程もあらせず、……廊下を急いで、もつとも授業中の遠慮、静
 に教員控所の板戸の前へ敷居越に髯面……というが頤頬などに
 貯えたわけではない。不精で剃刀を当てないから、むじやむじ
 やとして黒い。胡麻塩頭で、眉の迫った渋色の真正面を出
 したのは、苦虫と渾名の古物、但し人の好い漢である。

「へい。」

とただ云ったばかり、素気なく口を引結んで、真直に立つて

いる。

「おお、源助か。」

その職員室まんなか真中の大卓子おおテエブル、向側の椅子いすに凭かかった先生は、縞しまの布子ぬのこ、小倉こくらの袴はかま、羽織そでは袖そでに白墨摺ずれのあるのを背後うしろの壁かべに遣やり放なしに更紗さらさの裏うらを振よじつてぶらり。髪かみの薄うすい天窗あたまを真俯まうつむ向けにし、土瓶つちびんやら、茶碗ちawanやら、解ときかけた風呂敷包ふろし敷、混雑ごったに職員しやくいんのが散ちらばつたが、その控まもえた前まへだけ整然じつぜんとして、硯すずり箱ばこを右手みぎてへ引附ひきつけけ、一冊いっさく覚書かくらしいのを熟じつと視ながめていたのが、抜上ぬきあった額ぬかの広い、鼻はなのすつと隆たかい、髯ひげの無い、頤おとがの細こい、眉まゆのくつきりした顔を上げた、雑所ざいしよという教頭きやうとう心得こころえ。何か落着おちかぬ色いろで、

「こつちへ入れ。」

と胸を張つて袴の膝へちやんと手を置く。

意味ありげな体なり。茶碗を洗い、土瓶に湯を注せ、では無さ
 そうな処から、小使もその気構で、卓子の角へ進んで、太い
 眉をもじやもじやと動かしながら、

「御用で？」

「何は、三右衛門は。」と聞いた。

これは背の抜群に高い、年紀は源助より大分少いが、仔細も無
 かるう、けれども発心をしたように頭髪をすつぺりと剃附けた青
 道心の、いつも莞爾々々した滑稽けた男で、やっぱり学校に居
 る、もう一人の小使である。

「同役（といつても云う、土の果か、仲間の上りらしい。）は

番でござりまして、唯ただいま今水瓶みずがめへ水を汲くみこ込んでおりまするが。」

「水を汲込んで、水瓶へ……むむ、この風で。」

と云う。閉しめこ込んだ硝子窓がらすまどがびりびりと鳴つて、青空へ灰汁あくを

湛たたえて、上から揺ゆすつて沸立たせるような凄すさまじい風が吹く。

その窓を見向いた片頬かたほに、颯さつと砂すなほこり埃まを捲く影がさして、雑

所は眉ひそを顰ひそめた。

「この風が、……何か、風……が烈はげしいから火の用心か。」

と唐突だしぬけに妙な事を言出した。が、成程、聞く方もその風なれ

ば、さまで不思議とは思わぬ。

「いえ、かねてお諭してもござりますし、不断十分に注意はしまするが、差当り、火の用心と申すではござりませぬ。……やがて

と例の渋い顔で、横手の柱に掛ったボンボン時計を睨むようにじろり。ト十一時……ちようど半。——小使の心持では、時間がもうちつと経つていそうに思ったので、止まつてはおらぬか、とさて瞻めたもので。——風に紛れて針の音が全く聞えぬ。

そう言えば、全校の二階、下階、どの教場からも、声一つ、咳半分響いて来ぬ、一日中、またこの正午になる一時間ほど、寂寞とするのは無い。——それは小児たちが一心不乱、目まじろぎもせずにお弁当の時を待構えて、無駄な足踏みもせぬからで。静なほど、組々の、人一人の声も澄渡つて手に取るようだし、広い職員室のこの時計のカチカチなどは、居ながら小使部屋でもよ

く聞えるのが例の処、卜みつ瞻めても針はソツとも響かぬ。羅馬数字ロオマすうじも風の硝子窓のぶるぶると震うのに釣られて、波を揺ゆつて見える。が、分銅だけは、調子を違えず、とうんとうんと打つ——時計は止まったのではない。

「もう、これ午餉おひるになりまして、生徒方が湯を呑みに、どやどやと見えます。湯は沸たぎらせましたが——いや、どの小児衆こどもしゆも性急で、渴かし切つてござつて、突いきなり然あががぶりと喫りますので、気を着けて進ませぬと、直やけどきに火傷を。」

「火傷を：うむ。」

と長い顔を傾ける。

「同役とも申合わせます事で。」

と対向さしむかいの、可なり年配のその先生さえ少く見えるくらい、

老実な語くち。

「加減をして、うめて進ぜます。その貴方様あなたさま、水をフト失念

いたしましたから、精々せつせと汲込んでおりますが、何か、別して

三右衛門さんえむにお使でもござりますか、手前ではお間には合あい兼ね：

…」

と言懸けるのを、遮さって、傾けたまま頭かぶりを掉ふった。

「いや、三右衛門でなくってちょうど可いいのだ、あれは剽ひょう軽うきん

だからな。……源助、実は年上のお前を見掛けて、ちと話があるがな。」

出方が出方で、源助は一倍まじりとする。

先生も少し極^{きま}つて、

「もつとこれへ寄らんかい。」

と椅子をかたり。卓^{テエブル}子の隅を座取つて、身体^{からだ}を斜^{はす}に、袴^{はかま}をゆ

らりと踏開いて腰を落しつける。その前へ、小使はもつそり進む。

「卓子の向う前でも、砂埃^{すなッぽこりかす}に掠^すれるように、話がよく分らん、喋^し

舌^{やべ}るのに骨が折れる。ええん。」と咳^{しわぶき}をする下から、煙草^{たばこ}を填^つめ

て、吸口を卜頬へ当てて、

「酷^{ひど}い風だな。」

「はい、屋根も憂慮きづかわれます……この二三年と申しようござりまするが、どうぞござりませうぞ。五月も半ば、と申すに、北風らいふのこう烈はげしい事は、十年このかた以来にも、ついで覚えませぬ。いくら雪国でも、貴下あなたさま様、もうこれ布子ひとえものから単衣ひとえものと飛びまする処を、今日こんにちあたりはどういたして、また襦しやつ衣ももひきに股引ひつくりかえなどを貴下様、下女の宿下り見まするように、古葛籠ふるつづらを引ひ覆ひしますような事ごとでござりまして、ちよつと戸外おもてへ出て御覽ごらんじませ。鼻も耳も吹切られそうで、何とも凌しのぎ切れませんではござりますまいか。

三右衛門なども、鼻なきの尖まっかを真赤まっかに致して、えらい猿田彦さるだひこにござります。はは。」

と変哲もない愛想笑。が、そう云う源助の鼻も赤し、これはいかな事、雑所先生の小鼻のあたりも紅が染む。

「實際、厳しいな。」

と卓子テエブルの上へ、煙管きせるを持ったまま長く露出した火鉢むきだへ翳かざした、鼠色の襯衣しやつの腕を、先生ぶるぶると震わすと、齒をくいしばって、引立てるやうにぐいと擡もたげて、床板へ火鉢をどさり。で、足を踏ふ張り、両腕をずいと扱しごいて、

「御免を被こうむれ、行儀も作法も云つちやおられん、遠慮は不沙汰だ。源助、当れ。」

「はい、同役とも相談をいたしまして、昨日きのうにも塞ふさごうと思いました、部屋たまり（と溜たまりの事を云う）の炉ろにまた嘸かじりつきますよな次

第にござります。」と中腰になつて、鉄火箸かなひばしで炭あを開けて、五徳ごとくを摺ずつて引傾ひっかたがつた銅おの大葉おやかん罐かんの肌かを、毛深い手の甲かでむずと撫なでる。

「一杯沸たぎつたのを注さしましうで、——やがてお弁当べんとうでござりましよう。貴下様組きげさまぐみは、この時間御休憩ごきゅうけいで？」

「源助、その事だ。」

「はい。」

と獅鬚面しかみづらを後へ引込ひっこめて目を据たえる。

雑所ざつじょは前のめりに俯向うつむいて、一服吸すつた後あとを、口くちでふつつと吹落ふきおして、雁首がんくびを取とつて返かへして、吸殻すくがらを丁寧ていねいに灰かに突込つっこみ、

「閉込しめこんでおいても風かぜが揺ゆつて、吸殻すくがら一つも吹飛ふきばしばしそうそうでなら

ん。危いよ、こんな日は。」

とまた一つ灰を浴あびせた。瞳ひとみを返して、壁の黒い、廊下ながを視ながめ、

「可いいい塩梅あんばいに、そつちからは吹通ふさんな。」

「でも、貴方様あなたさままるで野原でござります。お児達こたちの歩行あるいた跡は、平たいらいちめん一面の足跡でござりまするが。」

「むむ、まるで野原……」

と陰気な顔をして、伸上のびあつて透すかしながら、

「源助、時に、何、今小児こどもを一人、少し都合があつて、お前達の何だ、小使溜こづかいだまりへ遣やつたつけが、何は、……部屋へやに居ゐるか。」

「居おりまするで、しよんぼりとしましてな。はい、……あの、嬢ちゃん坊ちゃんお嬢ちゃんの事ことでござりましょう、部屋へやに居ゐりまするでござい

ますよ。」

三

「嬢ちゃん坊ちゃん。」

と先生はちよつと口の裡うちで繰返したが、直ぐにその意味こころを知つて頷うなずいた。今年九歳ここのつになる、校内第一の綺麗きれいな少年、宮浜浪吉といつて、名まで優しい。色の白い、髪かみの美しいので、源助はじめ、嬢ちゃん坊ちゃん、と呼ぶのであろう？……

「しよんぼりしている。小使こづかいだまり溜だまりに。」

「時ならぬ時分に、部屋へぼんやりと入つて来て、お腹が痛むの

かと言つて聞いたでござりますが、雑所先生が小使溜へ行つてい
 るように仰おつしや有つたとばかりで、悄しおれ返つております。はてな、
 他ほかのものなら珍らしゆうござりませぬ。この兎こに限つて、悪いたずら戯
 をして、課業中、席から追出されるような事はあるまいが、どう
 したものでじや。……寒いで、まあ、当りなさいと、炉の縁へ坐ら
 せまして、手前も胡坐あぐらを搔かいて、火をほじりほじり、仔細しさいを聞き
 ましても、何も言わずに、恍惚うつとりしたように鬱ふさぎ込みまして、あ
 の可愛かきあわげに搔かきあわ合せた美しい襟ふところに、白う、そのふつくらとした顚あご
 を附着くつつけて、頻しきりとその懐ふところ中を覗のぞきこ込みますのを、じろじろ見
 ますと、浅葱あさぎの襦じゆばん袷はだが開はけまするまで、艶つやつや々露も垂れるげな、
 紅べにを溶といて玉にしたようなものを、溢こぼれまするほど、な、貴方あなた

様^ま。
」

「むむそう。」

と考えるようにして、雑所はまた頷く。

「手前、御存じの少々近視^{ちかめ}眼で。それへこう、霞^{かすみ}が掛^かりました工^く合^あいに、薄い綺麗な紙に包んで持っているのを、何か干菓子^{かみ}でもあろうかと存じました処。」

「菜^{ぐみ}莢^みだ。」と云つて雑所は居直る。話がここへ運ぶのを待構^{てい}えた体^{てい}であつた。

「で、ござりまするな。目覚める木の実で、いや、小児^{こども}が夢中になるのも道理でござります。」と感心した様子に源助は云うのであつた。

青梅もまだ苦い頃、やがて、李すももでも色づかぬ中うちは、實際いぢじこ苳と聞けば、小蕪こかぶのように干乾ひからびた青い葉を束ねて売る、黄色な実だ、と思つている、こうした雪国では、蒼空あおぞらの下に、白い日で暖く蒸す茱萸の実の、枝も撓たわわ々な処など、大人さえ、火の燃ゆるがごとく目に着くのである。

「家うちから持つてござつたか。教場へ出て何の事じゃ、大方そのせいで雑所様に叱られたものであろう。まあ、大人しくしていなさい、とそう云うてやりまして、実は何でござります。……あの児このお詫わびを、と間を見ておりました処を、ちようどお召でござりまして、……はい。何も小児でござります。日頃が日頃で、ついぞ世話を焼かした事の無い、評判の児でござりまするから、今日こんにち日

の処は、源助、あの児になりかわりまして御訴訟。はい、気が小さいかいたして、口も利けずに、とぼんとして、可哀かわいや、病氣にでもなりそうに見えまするがい。」と揉手もみでをする。

「どうだい、吹く事は。酷ひどいぞ。」

と窓と一所に、肩をぶるぶると揺ゆつて、卓テエブル子の上へ煙管きせるを棄すてた。

「源助。」

と再度あらたま更まつて、

「小児こどもが懐ふところ中の果物くだものなんか、袂たもとへ入れさせれば済む事よ。

どうも変に、氣かに懸かる事があつてな、小児こどもどころか、お互に、大人が、とぼんとならなければ可いいが、と思うんだ。

昨日夢を見た。」

と注いで置きつの茶碗に残った、冷つめたい茶をがぶりと飲んで、

「昨日な、……昨夜ゆうべとは言わん。が、昼寝をしていて見たのじや

ない。日の暮れようという、そちこち、暗くなった山道だ。」

「山道の夢でござりまするな。」

「否や、實際山を歩行あるいたんだ。それ、日曜さ、昨日は——源助、

お前は自おのずから得ている。私は本と首くび引きだが、本ほん草ぞうが好物で

な、知ってる通り。で、昨日ちと山を奥まで入った。つい浮うか々うか

と谷々へ釣込まれて。」

こりや途中で暗くならなければ可いいが、と山の陰がちと憂きづ慮かわれるような日ざしになった。それから急いで引返したのよ。」

四

「山時分じやないから人ツ子に逢あわず。また茸たけがり狩にだつて、あんなに奥まで行くゆものはない。随分路みちでもない処を潜ひそつたからな。三ツばかり谷へ下りては攀よじ上り、下りては攀上りした時は、ちと心細くなつた。昨夜ゆうべは野宿かと思つたぞ。

でもな、秋とは違つて、日の入いりが遅いから、まあ、可よかつた。やつと旧道めぐに繞めぐつて出たのよ。

今日とは違つた嘘うそのような上天気で、風なんか薬くすりにしたくもなかつたが、薄着うすぎで出たから晩方は寒い。それでも汗あせの出るまで、

脚絆掛きやはんがけで、すたすた来ると、幽かすかに城が見えて来た。城の方にな、可厭いやな色の雲が出ていたには出ていたよ——この風になつたんだらう。

その内に、物見の松の梢こすえさきの尖が目に着いた。もう目の前の峰を越すと、あの見霽みはらしの丘へ出る。……後は一雪崩ひとなだれにずるずると屋敷町の私の内へ、迂すべり込まれるんだ、と吻ほっと息をした。ところがまた、知ってる通り、あの一町場ひとちようばが、一方谷、一方覆被おっかぶさつた雑木林で、妙に真昼間まつびるまも薄暗い、可厭いやな処じやないか。「名代なだいな魔所まじよでござります。」

「何か知らんが。」

と両手で頤あごを扱しごくと、げっそり瘠やせたような顔色かおつきで、

「一ツきり、ほらあな洞穴を潜くぐるようで、それまで、ちらちら城下が見えた、大川の細い靄もやも、大橋の小さな灯も、何も見えぬ。

ざわざわざわと音がする。……樹の枝じや無い、右のな、その崖がけの中腹ぐらいな処を、熊笹くまざさの上へむくむくと赤いものが湧わいて出た。幾いくひき疋となく、やがて五六十、夕焼がそこいらを胡う乱ろつくように……皆みんな猿だ。

丘の隅にや、荒れたが、それ山王さんのうの社やしろがある。時々山奥から猿が出て来るといふ処だから、その数の多いにはぎよつとしたが——別に猿というに驚くこともなし、また猿の面つらの赤いのに不思議はないがな、源助。

どれもこれも、どうだ、その総身の毛が真赤まっかだろう。

しかも数が、そこへ来た五六十疋という、そればかりじゃない。後へ後へと群むらり続いて、裏山の峰へ尾を曳ひいて、遥はるかに高い処から、赤い滝を落し懸けたのが、岩に潜くぐってまた流れる、その末の開いた処が、目の下に見える数よ。最も遠くの方は中絶えして、一ツ二ツずつ続いたんだが、限りが知れん、幾百居るか。

で、何の事はない、虫眼鏡で赤あか蟻ありの行列を山へ投懸けて視なめるようだ。それが一ツも鳴かず、静まり返って、さっさっさつと動く、熊笹がざわつくばかりだ。

夢だろう、夢でなくって。夢だと思つて、源助、まあ、聞け。

……実は夢じゃないんだが、現在見たと云つてもほんとはしま
い。」

源助はこれを聞くと、いよいよ渋つて、頤あごの毛をすくすくと立てた。

「はあ。」

と息を内へ引きながら、

「随分、ほんとうにいたします。場所がらでござりまするで。雑所様、なかなか源助は疑いませぬ。」

「疑わん、ほんとに思う。そこでだ、源助、ついでにもう一ツほんとしてもらいたい事がある。」

そこへな、背後うしろの、暗い路をすつと来て、私に、ト並んだと思
う内に、大跨おおまたに前へ拔越ぬけこしたものがあゝる。……

山遊びの時分には、女も駕籠かごも通る。狭くはないから、肩摺かたすれ

るほどではないが、まぎまぎと足が並んで、はつと不意に、こつちが立たちど停まる処を、抜けた。

下したやみ闇ながら——こつちももう、僅わずかの処だけれど、赤い猿が

夥おびただしいので、人恋しい。

で透かして見ると、判然はつきりとよく分つた。

それも夢かな、源助、暗いのに。——

裸はだか体に赤合羽あかがっぱを着た、大きな坊主だ。」

「へい。」と源助は声を詰めた。

「真ま黒な円まい天窓あたまを露出むきだしでな、耳元を離した処へ、その赤合羽

の袖を鯨しやちこぼ子張しやちこぼらせる形に、大な肱おおきひじを、ト鍵かぎ形に曲げて、柄えいの

短い赤い旗を翻ひらひら々と見せて、しやんと構えて、ずんずん通る。

……

旗はたは真赤まっかに宙あおを煽おつ。

まさかとは思う……ことにその言った通り人恋しい折からなり、
 対手あいての僧そうぎ形ようにも何なに分ぶんか気が許されて、

(御坊、御坊。)

と二声ほど背後うしろで呼んだ。「

五

「物凄ものすげさも前さきに立つ。さあ、呼んだつもりもりの自分の声のが、口へ
 出たか出んか分らないが、一も二もない、呼んだと思うと振向い

た。

顔は覚えぬが、額あごも額も赤いように思った。

(どちらへ?)

と直ぐに聞いた。

ト竹を破わるような声で、

(城下を焼きに参るのじゃ。)と言う。ぬいと出て脚あしもと許へ、五つ六つの猿が届いた。赤い雲を捲まいたようにな、源助。」

「……………」小使は口も利かず。

「その時、旗を衝つと上げて、

(物見からちと見物なされ。)と云うと、上げたその旗を横に、
ひらり 翻然と返して、指したと思えば、峰に並んだ向うの丘の、松こずえの梢

へ颯と飛移ったかと思う、旗の煽つような火が松明を投附けたように※と燃え上る。顔も真赤に一面の火になったが、遙かに小さく、ちらちらと、ただやつぱり物見の松の梢の処に、丁子頭が揺れるように見て、気が静ると、坊主も猿も影も無い。赤い旗も、花火が落ちる状になくなったんだ。

小児が転んで泣くようだ、他愛がないじゃないか。さてそうなつてから、急に我ながら、世にも怯えた声を出して、

(わっ。)と云つてな、三反ばかり山路の方へ宙を飛んで遁出したと思え。

はじめて夢が覚めた気になつて、寒いぞ、今度は。がちがち震えながら、傍目も触らず、坊主が立ったと思う処は爪立足をし

て、それから、お前、前の峰を引搔くように駆上つて、……ま
しぐらにまた摺落ちて、見霽しへ出ると、どうだ。夜が明けたよ
うに広々として、崖のはずれから高い処を、乗出して、城下を一
人で、月の客と澄まして視めている物見の松の、ちようど、赤い
旗が飛移つた、と、今見る処に、五日頃の月が出て蒼白い中に、
松の樹はお前、大蟹が海松房を引被いて山へ這出た形に、し
つとりと濡れて薄靄が絡つている。遙かに下だが、私の町内と
思うあたりを……場末で遅廻りの豆腐屋の声が、幽に聞えようと
いうのじゃないか。

話にならん。いやしくも小児を預つて教育の手伝もしようとい
うものが、まるで狐に魅まれたような気持で、……家内にさえ、

話も出来ん。

歸つて湯に入つて、寝たが、綿わたのように疲れていながら、何か、それでも寝ねぐるし苦くつて時々早鐘を撞つくような音が聞えて、吃驚びつくりして目が覚める、と寝汗でぐつちより、それも半分は夢心地さ。

明方からこの風さな。」

「正寅しょうとらの刻からでござりました、海嘯つなみのように、どつと一いっと時に吹出しましたに因つて存じております。」と源助の言ことばつき、あたかも口上。何か、恐入こいつている体がある。

「夜があけると、この砂煙すなけぶり。でも人間、雲霧を払った気持だ。そして、赤合羽の坊主の形もちらつかぬ。やがて忘れてな、八時、九時、十時と何事もなく課業を済まして、この十一時が読本とくほんの

課目なんだ。

な、源助。

授業に掛^かつて、読出した処^かが、怪訝^{おかし}い。消火器の説明がしてある、火事に対する種^{いろいろ}々の設備のな。しかしもうそれさえ気にならずに業をはじめて、ものの十分も経^たったと思うと、入口の扉を開けて、ふらりと、あの児^こが入^こって来たんだ。」

「へい、嬢ちゃん坊ちゃんが。」

「そう。宮浜がな。おや、と思った。あの児^こは、それ、墨の中に雪だから一番目に着く。……朝、一二時間ともちゃんと席に着いて授業を受けたんだ。——この硝^{がらすまど}子窓の並びの、運動場のやっぱり窓際に席があつて、……もつとも二人並んだ内側の方が。」

さっぱり気が着かずにいた。……成程、その席が一ツ穴になつて
いる。

また、箸はしの倒れた事でも、沸返にえかえつて騒立つ連中が、一人それ
まで居なかつたのを、誰もいつつけ口をしなかつたも怪あやしいよ。

ふらりと廊下から、時ならない授業中に入つて来たので、さす
がに、わつと動揺どよめいたが、その音も戸外おもての風に吹攫ふきさらわれて、
どつと遠くへ、山へ打ぶつかるように持つて行ゆかれる。口や目ばか
り、ばらばらと、動いて、騒いで、小児等こどもらの声は幽かすかに響いた。…
…」

「私も不意だから、変に気を抜かれたようになって、とぼんと、あの可愛らしい綺麗な児を見たよ。」

密と椅子の傍へ来て、愛嬌づいた莞爾した顔をして、

(先生、姉さんが。)

と云う。——姉さんが来て、今日は火が燃える、大火事があつて危ないから、早仕舞はやしまいにしてお帰りなさい。先生にそうお願いして、と言いますから……家へ帰らして下さい、と云うんです。含羞はにかむ児だから、小さな声して。

風はこれだ。

聞えないで僥倖さいわい。ちよつとでも生徒の耳に入ろうものなら、

壁を打抜く騒動だろう。

もうな、火事と、聞くと頭から、ぐらぐらと胸へ響いた。

騒がぬ顔して、皆には、宮浜が急に病気になったから今手当をして来る。かねて言う通り静しずかにしているように、と言聞かしておいて、精々落着いて、まず、あの兎をこの控所へ連れ出して来たんだ。

処で、気を静めて、と思うが、何分、この風が、時々、かつと赤くなったり、黒くなったりする。な源助どうだ。こりや。」

と云う時、言葉が途切れた。二人とも目を据みまもえて瞻みまもるばかり、

一時、屋根を取ひしつて挫なぐぐがごとく吹き撲なぐる。

「気が騒いでならんが。」

と雑所は、しつかと腕組をして、椅子の凭りに、背中を摺着けるばかり、びたりと構えて、

「よく、宮浜に聞いた処が、本人にも何だか分らん、姉さんというのが見知らぬ女で、何も自分の姉という意味では無いとよ。

はじめて逢ったのかと、尋ねる、とそうではない。この七日ばかり前だそうだ。

授業が済んで帰るとなる、大勢列を造つて、それな、門まで出る。足並を正さして、私が一二と送り出す……

すると、この頃塗直した、あの蒼い門の柱の裏に、袖口を口へ当てて、小児の事で形は知らん。頭髪の房々とあるのが、美しい水晶のような目を、こう、俯目ながら清しゆう瞪つて、列を一人

一人見遁みのがすまいとするようだっけ。

物見の松はここからも見える……雲のようなはそればかりで、よくよく晴れた暖い日だったと云う……この十四五日、お天気続きだ。

私も、毎日門外まで一同を連出すんだが、七日前にも二日こつちも、ついぞ、そんな娘を見掛けた事はない。しかもお前、その娘が、ちらちらと白い指でめんない千鳥をするように、手招きで引着けるから、うっかり列を抜けて、その傍そばへ寄ったそうよ。それを私は何も知らん。

(宮浜の浪ちやんだねえ。)

とこの国じゃない、本で読むような言ことばで聞くとうなずき。頷くと、

(好いものを上げますから私と一所に、さあ、行きましょう、みんなに構わないで。)

と、私等を構わぬ分に扱ったは酷い！　なあ、源助。

で、手を取られるから、ついて行くと、どこか、学校からさまざまで遠くはなかったそうさ。荒れには荒れたが、大きな背戸へ裏木戸から連込んで、菜蓂ぐみの樹の林のような中へ連れて入った。目のふちも赤らむまで、ほかほかとしたと云う。で、自分にも取れば、あの児にも取らせて、そして言う事が妙ではないか。

(沢山たんとお食あがんなさいよ。皆みんな、貴下あなたの阿母おつかさんのような美しい血になるから。)

と言ったんだそうさ。土産にもくれた。帰って誰が下すった、

と父おやじにそう言いましょうと、聞くと、

(貴下のお亡なくなんなすつた阿母おつかさんのお友だちです。)

と言つたつてな。あの兎の母親はなくなつた筈はずだ。

が、ここまではとにかく無事だ、源助。

その婦人が、今朝また、この学校へ来たんだとな。」

源助は、びくりとして退さがる。

「今度は運動場。で、十時の算術が済んだ放課の時だ。風にもめ
げずに皆みんな駆出すが、ああいう兎だから、一人で、それでも遊あそびさ
な……石盤いしばんへこう姉あねさま様の顔を描かいていると、硝子戸がらすどこし越に……夢
にも忘れない……その美しい顔を見せて、外へ出るよう目で教え
る……一度逢つたばかりだけれども、小兎は一目顔を見ると、も

うその心が通じたそうよ。」

七

「宮浜はな、今日は、その婦人があか紅い木のこ実のかんざし簪を挿していた、
やつぱりぐみ茱萸だろうと云うが、果物の簪は無かろう……小児の目
だもの、さんご珊瑚かも知れん。

そんな事はとにかくだ。

直ぐに、いそいそ嬉々と廊下から大廻りに、ちようど自分の席の窓の
外。その婦人の待っている処へ出ると、それ、散々に吹散らされ
ながら、小児が一杯、ふらふらしているだろう。

源助、それ、近々に学校で——やがて暑さにはなるし——余り
あおこけ青苔が生えて、石垣も崩れたというので、井戸側を取替えるに、
おおわ石の大輪が門の内にあつたのを、小児だちがいたずら悪戯に庭へ転がし
 出したのがある。——あれだ。

大人なら知らず、円くてすべ迂るにせい、小児が三人や五人ではち
 よつと動かぬ。そいつだが、婦人が、あの児を連れて、すつと通
 ると、むくりと脈を打ったように見えて、ころころと芝の上を斜は
すつか違いに転がり出した。

(やあい、井戸側が風で飛ばい。)か、何か、哄どつと呐喊を上げて、
 小児が皆みんなそれを追懸けて、一ひとかたまり団まりに黒くなつて駆出すと、その
 反対の方へ、誰にも見着けられないで、澄まして、すつと行つた

と云うが、どうだ、これも変だろう。

横手の土塀際の、あの棕櫚しゅろの樹の、ばらばらと葉が鳴る蔭へ入つて、黙つて背せなかを撫なでなぞしてな。

そこで言聞かされたと云うんだ。

(今に火事がありますから、早く家うちへお帰んなさい、先生にそう云つて。でも学校の教師さん、そんな事がありますかッて肯ききなさらないかも知れません。黙つてずんずん帰つて可ようござんす。怪け我がには替えられません。けれども、後で叱いられると不可けませんから、なりたけお許しをうけてからになさいましよ。

時刻はまだ大丈夫だとは思いますが、そんな、こんなで帰りが遅れて、途中、もしもの事があつたら、これをめしあがれよ。そ

うすると烟けむに捲まかれませんか。)

とそう云つてな。……そこで、袂たもとから紙包みふとこを出して懐中へ入れて、おさ圧えて、こう抱寄せるようにして、そして襟かきあわを搔合あせてくれたのが、その茱萸ぐみなんだ。

(私がついていられると可いいんだけど、姉さんは、今日は大事な日ですから。)

と云う中うちにも、風のなぐれで、すつと黒髪を吹いて、まるで顔が隠れるまで、むらむらと懸かかる、と黒雲が走るようで、はらりと吹分ける、と月が出たように白い頬が見えたと云う……

けれども、見えもせぬ火事があると、そんな事は先生には言いいにく憎くい、と宮浜かぶりが頭を振ったそうだ。

(では、浪ちゃんは、教師さんのおつしやる事と、私の言う事と、どっちをほんとうだと思います。——)

こりや小児こどもに返事が出来なかつたそうだが、そうだろう……なあ、無理はない、源助。

(先生のお言ことばに嘘はありません。けれども私の言う事はほんとうです……今度の火事も私の気でどうにもなる。——私があるものに身を任せれば、火は燃えません。そのものが、思おもの叶いわかなない仇あだに、私が心一つから、沢山の家も、人も、なくなるように面つら当あてにしますんだから。

まあ、これだつて、浪ちゃんが先生にお聞きなされば、自分の身体からだはどうなつてなりとも、人も家も焼けないようにするのが道

だ、とおつしやるでしょう。

殿方の生命いのちは知らず、女の操というものは、人にも家にもかえられぬ。……と私はそう思うんです。そう私が思う上は、火事が必要ならばなりません。今云う通り、私へ面当てに焼くのだから。

まだ私たち女の心は、貴下あなたの年では得心が行かないで、やつぱり先生がおつしやるように、我身を棄てても、人を救うが道理のように思うでしょう。

いいえ、違います……殿方の生命は知らず。）

と繰返して、

（女の操というものは。）と熟じつと顔を凝視みつめながら、

（人にも家にも代えられない、と浪ちやん忘れないでおいでなさい

い。今に分ります……紅あかい木の実を沢山たんと食べて、血の美しく綺麗な児こには、そのかわり、火の粉も桜の露となつて、美しく降るばかりですよ。さ、いらつしやい、早く。氣を着けて、私の身体からだも大切な日ですから。」

と云う中うちにも、裾すそも袂も取つて、空へ頭髪かみながら吹上げそうだったつてな。これだ、源助、窓硝子まどがらすが波を打つ、あれ見い。」

八

雑所先生は一息吐ついて、

「私が問うのに答えてな、あの宮浜はかねて記憶の可いい処を、母

のない児だ。——優しい人の言う事は、よくよく身に染みて覚えたと見えて、まるで口移しに諛誦あんしようをするようにここで私に告げたんだ。が、一々、ぞくぞくはだ膚に粟あわが立った。けれども、その婦人の言う、謎のような事は分らん。

そりや分らんが、しかし詮せんずるに火事がある一条だ。

(まるで嘘とも思わんが、全く事実じやなからう、ともかく、小こ使溜づかいだまりへ行つて落着いていなさい、ちつと熱もある。)

額を撫なでて見ると熱いから、そこで、あの児をそららへ遣やつてよ。

さあ、気になるのは昨夜ゆうべの山道の一件だ。……赤い猿、赤い旗な、赤合羽を着た黒坊主よ。」

「緋ひ、緋ひの法衣ころもを着たでござります、赤合羽ではござりませぬ。魔、魔の人でござりますが。」とガタガタ胴震いをしながら、躡たしなめるように言う。

「さあ、何か分らぬが、あの、雪に折れる竹のように、バシリとした声して……何と云った。

(城下を焼きに参るのじや。)

源助、宮浜の児を遣ったあとで、天窗あたまを引抱ひっかかえて、こう、風の音を忘れるように沈しっと考えると、ひよい、と火を磨するばかりに、目に赤く映ったのが、これなんだ。」

と両手で控帳の端を取って、斜めに見せると、楷書かいしよで細字さいじに認したためたのが、輝くごとく、もそりと出した源助の顔に赫かツと照つ

て見えたのは、朱で濃く、一面の文字もんじである。

「へい。」

「な、何からはじまった事だか知らんが、ちょうど一週間前から、ふと朱でもって書き続けた、こりや学校での、私の日記だ。

昨日きのうは日曜で抜けている。一週間。」

と颯さつと紙が匆はねて、小口をばらばらと繰返すと、戸外おもての風の渦巻まきに、一ちぎれの赤い雲が卓テ子エブルを飛けぶ気勢はいする。

「この前の時間にも、（暴風）に書いて消して（烈風）をまた消して（颯風ぐふう）なり、と書いた、やつぱり朱で、見な……

しかも変な事には、何を狼うろたえ狽たえたか、一枚半だけ、罫紙けいしで残して、明日の分を、ここへ、これ（火曜）としたぜ。」

と指す指が、ひつつりのように、びくりとした。

「読本が火の処……源助、どう思う。他の先生方は皆な私より偉いには偉いが年下だ。校長さんもずつとお少い。」

こんな相談は、故老に限ると思つて呼んだ。どうだろう。万一の事があるとなら、あえて宮浜の児一人でない。……どれも大事な小児たち——その過失で、私が学校を止めるまでも、地を踏んでなりと直ぐに生徒を帰したい。が、何でもない事のように、これがまた一大事だ。いやしくも父兄が信頼して、子弟の教育を委ねる学校の分として、婦、小児や、菜蕒ぐらいの事で、臨時休業は沙汰の限りだ。

私一人の間拔で済まん。

第一そのような迷信は、任にんとして、私等が破つて棄ててやらなけりやならんのだらう。そうかつてな、もしやの事があるとすると、何より恐ろしいのはこの風だよ。ジャンと来て見ろ、全市瓦かわらは数えるほど、板葺いたぶき屋根が半月の上も照込んで、焚たき附つけ同様。——何と私等が高台の町では、時ならぬ水みづ切ぎれがしていようという場合ではないか。土の底まで焼やきぬ抜けるぞ。小児たちが無事に家へ帰るのは十人に一人もむずかしい。

思案に余つた、源助。気が気でないのは、時が後おくれて驚破すわと言つたら、赤い実を吸え、と言つたは心細い——一時半いつときはんじ時を争うんだ。もし、ひよんな事があるとすると——どう思う、どう思う、源助、考かんが慮えは。——

「尋常ただ、尋常ごとではござりません。」と、かつと卓子テエブルに拳こぶしを搦つかんで、

「城下の家の、寿命が来たんでござりましょう、争われぬ、争われぬ。」

と半分目を眠つて、盲目めくらがするように、白しろまなこ眼まなこで首を据えて、天井を恐ろしげに視ながめながら、

「ものはあるげにござりまして……旧藩頃の先主人が、夜学の端はしに承うかります。昔その唐からの都の大道を、一時あるとき、その何でござりまして、怪しげな道人が、髪かみを捌さばいて、何と、骨だらけな蒼あおい胸むねを岸破がばがば々々と開ひけました真中まんなかへ、人ひと、人ひとという字あざを書いたのを搔かきつぱだ開ひけて往来中わらいちゆう駆廻かまったげでござります。いつかも同役にも話し

た事でござりますが、何の事か分りません。唐の都でも、皆みんななが不思議がつておりますると、その日から三日目に、年代記にもないほどな大火事が起りました。」

「源助、源助。」

と雑所大きに急せいて、

「何だ、それは。胸へ人という字を書いたのは。」とかかる折から、自分で考えるのがまだるこしそうであった。

「へい、まあ、ちよいとした処、早いのが可ようございます。ここへ、人と書いて御覧じやりました。」

風の、その慌あわただしい中でも、対あいて手が教頭心得の先生だけ、もの問とわれた心の矜ほこりに、話を咲せたい源助が、薄汚れた襯衣しやつの鈕ぼたんをはずし

て、ひくひくとした胸を出す。

雑所も急せきごころ心に、ものをも言わず有合わせた朱筆しゆふでを取つて、乳を分けて朱あかい人。と引かれて、カチカチと、何か、齒をくいしめて堪こらえたが、突込む筆の朱が刎はねて、勢いきおいで、ぱつと胸毛かかに懸かかると、火を曳ひくように毛が動いた。

「あ熱あつ々つ！」

と唐突だしぬけに躍り上つて、とんと尻餅しりもちを支つくと、血声を絞しぼつて、

「火事だ！ 同役、三右衛門、火事だ。」と喚わめく。

「何だ。」

と、雑所も棒立ちになつたが、物狂ものぐるわしげに、

「なぜ、投げる。なぜ茱萸ぐみを投附なける。宮浜。」

と声を揚げた。廊下をばらばらと赤く飛ぶのを、浪吉が茱萸を擲つと一目見たのは、矢を射るごとく窓硝子を映す火の粉であった。

途端に十二時、鈴を打つのが、ブンブンと風に響くや、一つずつ十二ヶ所、一時に起る摺半鉦、早鐘。

早や廊下にも烟が入って、暗い中から火の空を透かすと、学校の蒼い門が、真紫に物凄いの。

この日の大火は、物見の松と差向う、市の高台の野にあった、本願寺末寺の巨刹の本堂床下から炎を上げた怪し火で、ただ三時が間に市の約全部を焼払った。

烟は風よりも疾く、火は鳥よりも迅く飛んだ。

人畜の死傷少からず。

火事の最中、雑所先生、袴はかまの股立ももだちを、高く取つたは効かい々がいしいが、羽織も着ず……布子の片袖引断ひつちぎれたなりで、足袋たびはだし跣足はだしで、据すえまなこ眼おもあいの面藍おもあいのごとく、火と烟の走る大道を、踟躕ひよろひよろと歩行あるしていた。

屋根から屋根へ、——樹こずえの梢こずえから、二階三階が黒烟ただよりに漾ただよう上へ、飜ひらひら々と千鳥に飛交う、真赤まっかな猿まっかの数を、行く行く幾度も見ゆた。

足許あしもとには、人も車も倒れている。

とある十字街へ懸かかつた時、横からひよこりと出て、斜はすに曲り角へ切れて行く、昨夜ゆうべの坊主に逢つた。同じ裸に、赤合羽を着たが、

こればかりは風をも踏固めて通るように確しかとした足取であった。
が、赤旗を捲まいて、袖へ抱くようにして、いささか逡巡しゅんじゆんの
体ていして、

「焼け過ぎる、これは、焼け過ぎる。」

と口の裡うちつぶやで呟つぶやいた、と思うともう見えぬ。顔を見られたら、雑
所は灰になろう。

垣も、隔ても、跡はないが、倒れた石燈籠いしどうろうの大おおきがある。
何なに某がしの邸やしきの庭らしい中へ、烟に追われて入ると、枯木に夕焼の
したような、火の幹、火の枝になった大樹もとの下に、小さな足を投
出して、横坐りになった、浪吉の無事な姿を見た。

学校は、便宜に隊を組んで避難したが、皆ちりちりになったの

である。

と見ると、恍惚うっとりした美しい顔を仰向けて、枝からばらばらと降ふりかか懸る火の粉を、霰あられは五合ごんごと掬すくうように、綺麗な袂たもとで受けながら、

「先生、沢山に茱萸が。」

と云つて、臈ろうた長けるまで莞爾にっこりした。

雑所は諸もろひざ膝を折つて、倒れるように、その傍かたわらで息を吐ついた。が、そこではもう、火の粉は雪のように、袖かかへ掛つても、払えば濡れもしないで消えるのであった。

明治四十四（一九一）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

朱日記

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>